

# 教育原論

教職課程科目/2単位/T授業

担当教員	登坂 学
■使用テキスト	広岡義之(著)、北村信明(絵)『絵で読む教育学入門』ミネルヴァ書房
◆参考テキスト	①教育学の辞典・事典(例:『新版 教育小事典 第3版』学陽書房, など) ②テキスト各章末の「参考文献」欄に掲載された図書などのほか、次のものを参照。 田嶋一ほか(著)『やさしい教育原理 第3版』有斐閣アルマ

## 講義概要・一般目標

人間形成と教育の基本的概念、教育の理念と制度の歴史的発展、教育思想の歴史的展開について理解するとともに、教育課程と教育評価、学力形成の課題と方法など学校の基本的任務について学び、教育の現代的課題について考える視座を身に付けます。

(1) 教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解する。(2) 教育の歴史に関する基礎的知識を身に付け、過去から現代に至るまでの教育の理念と制度の発展の経緯について理解する。(3) 教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育および学校との関わりを理解する。(4) 子育てと教育をめぐる現代的諸課題を理解する。

## 到達目標

- 1) 教育学の基本的諸概念および教育の本質と目的を説明できる。
- 2) 子どもと教師、家庭・地域と学校など教育を成り立たせる諸要素とそれらの相互関係を説明できる。
- 3) 子育て(産育)と教育の歴史、近代教育制度の成立と展開を説明できる。
- 4) 現代社会における教育課題とその歴史的背景について説明できる。
- 5) 子育て(産育)と教育に関する思想とその発展について説明できる。

## 評価方法

科目単位認定試験により評価します。

## 学習指導

\* テキスト各章のポイントを以下に示します。テキストで学ぶ際の参考にしてください。

### 第1章 教育とは何か

この章のポイント

本章では「教育の定義」について考えます。しかし、入門者にとってはもちろんのこと、長年教育を研究してきた学者にとっても、このテーマに万人が納得する明確な答えを提示することは困難です。あまりに大きく、漠然とした問いだからです。しかしながら、この問いに限定を付し細分化することによって少しだけ答えやすくすることができます。それが「1 教育の定義(その1) 個人主義的な定義」であり「2 教育の定義(その2) 集団主義的な定義」で、更に個別の論点である「3 教育の必要性和可能性」「4 教育における遺伝と可能性の問題」「5 生理的早産」「6 人間は教育によってのみ人間になることができる」「7 アヴェロンの野生児」等によって補足説明されています。これらのキーワードやセンテンスを抛り所に、先達の知見を参考にしながら、皆さん方なりの教育観を形成する一助としていただければと思います。

## 第2章 教育の源流

### この章のポイント

紀元前数百年前の古代ギリシャは偉大な哲学者たちを生み出しました。その人間洞察の中には、教育学の考え方の基本となる極めて重要な考え方が多く含まれています。ここでは「1 ソクラテスの「無知の知」」「2 相手のうちに蔵されている可能性を「引き出す」こと」「3 ソクラテスの助産術」「4 『メノン』にみる問答法」「5 ドクサとエピステーメー」「6 アイデア界への志向」「7 洞窟の比喻」「8 全人間の本質におけるパイデア」等のキーワードやキーセンテンスで読み解いていきます。大昔のお話のように思われるかもしれませんが、実はその多くが現代の教育現場で応用可能、否、今だからこそ必要とされている教育の基本的な考え方でありスキルなのです。

## 第3章 教育の歴史

### この章のポイント

古代ギリシャから近世まで続く教育史（人物・思想）を概観します。時系列で「1 古代ギリシャの教育」「2 実用面に秀でた古代ローマの民族」「3 中世のキリスト教と教育思想」「4 ルネサンス・宗教改革の人間観と教育思想」「5 バロックという時代精神」の各テーマを学んでいきますが、ここは中学や高校の歴史テキスト等を準備して、参照しつつ読んでいかれることをお勧めします。そのようにしますと、悠久の世界史の中に教育思想が見事に位置付けられることを再確認されることでしょう。

## 第4章 初期の教育と学習

### この章のポイント

優良な成育環境のもとで幼い子どもを適切に監護する重要性は、現在でこそ当たり前なこととみなされています。本章では、このような考えの萌芽と発展を跡付けてまいりましょう。18-20世紀における人権意識の高まりと科学的思考の発展は教育の分野にも大きな影響を与えました。子どもが大人の所有物であり、小さな大人であり、労働力であった時代から、守られるべき存在、成長していく存在、大きな可能性を秘めた存在へと変化し、優良な環境の下で子どもをどのように教育すべきかが諸科学や教育実践から導き出された成果に基づいて議論された時代です。「1 家という保育室」「2 ペスタロッチの人と生涯」「3 信頼の最初の芽」「4 幼児教育の重要性について」「5 乳児にとっての母親の影響力」「6 ボウルビィの「愛着」理論」「7 ローレンツの「刻印づけ」」「8 ハーローのアカゲサルの実験」「9 連合理論 S-R 説」「10 認知理論 S-S 説」の各節の文中には、心理学や精神医学の重要成果が紹介されています。これらはその多くが現代の幼児教育に生かされています。ぜひ理解し、自分のものにしてください。

## 第5章 教育学と実存哲学

### この章のポイント

第2章で学んだことに関係しますが、従来教育学では「2 技術論的な作る教育」と「3 有機体論的な成長に委ねる教育」の対立がありましたが、「一步一步完成に向かって進歩し、それに対応して人間は連続的に完成に向かって教育できる」との共通性がありました（「1 伝統的な教育学と実存哲学」「4 二つの伝統的な教育学概念と連続性」）。この見方に異議を唱える「実存哲学」に基づく教育学の考え方を紹介しています（「5 連続性と非連続性の橋渡し 実存哲学へ」）。一方は、生まれたばかりの子どもを「白紙」とみなし、そこに積極的に優良な書き込みをすることによって人間にしていく教育観。もう一方は、人間には生まれながらにして既に人間として諸能力を内在しているのだから、障害となるものを排除し優良な環境の下で放任することでそれを自然に引き出すことが大切だと考える教育観。この二つの教育観が教育現場における二大潮流で互いに相容れないものでしたが、ここで第三の考え方が登場したのです。以下、これを「6 日々の生活の中での非連続的の局面とは」「7 道徳的危機に直面したとき」「8 人間の決断と自由」「9 教育はつねに覚醒である」「10 訓戒や訴えとは」で分かりやすく説明しています。この章からは、時に「痛み」を伴う外からの働きかけによりこれまでの自分と断絶し成長する子どもの可能性をはっきりと認識できるに違いありません。

## 第6章 教師と子どもの関係

### この章のポイント

教師の不祥事がマスメディアで大きく取り上げられる昨今、教師には確固たる教育的愛情、倫理観、遵法精神が求められています。ここではその前提となる「信頼感」（「1 教員に求められる教育的使命感や責任感」）、つまり子どもが学校で成長していくうえで不可欠な、教師と生徒の間の「相互の信頼感」について深く考えてみましょう。以下、「2 子どもに対する「信念」が成長を決定づける」「3 包括的信頼という概念」「4

教師と生徒の間で醸し出される「雰囲気」「5 快活の感情」「6 教師の職業病」「7 朝のような晴れぼれとした感情」の各節で、教師の身に着けるべき「プラスのエネルギー」がどのようなものであるかを具体的に理解しましょう。

## 第7章 実存と出会い

### この章のポイント

第5章との関連で、実存哲学者ブーバーの言説を参考にしつつ、教育における「出会い」について考えていきましょう。各節「1 実存的な出会い」「2 〈我と汝〉と〈誰とそれ〉」「3 〈我とそれ〉の関係」「4 〈我と汝〉の我」「5 〈我と汝〉〈我とそれ〉の特徴」の説明は平易で丁寧なので、順番に読み解いていけば、教師と生徒の出会いとは「たんに知的に理解するというのではなく、自分の根本がゆさぶられ、自分の生き方が変わるという出来事である」ことをはっきりと理解できるでしょう。

## 第8章 青年期の教育問題と防衛機制

### この章のポイント

思春期は「疾風怒濤」と形容され、従来から学校教育や家庭教育において配慮を要する時期とされてきました。教師であれ親であれ、この発達段階にある子どもをどのように育て導くべきか悩んでいることでしょう。ここでは心理学や精神医学の成果に学びつつ、教育者としての基本的な知見を得ることを目的とします。各章「1 カウンセリングマインド」「2 青年期におけるモラトリアム」「3 青年期における心理的離乳」「4 「中1ギャップ」とは何か」「5 無意識と人格構造 イド・自我・超自我」「6 人間行動の様式としての防衛機制（適応規制）」で学ぶ内容は、心理学の入門テキストと重複するところも多いですが、むしろそれだけに教育学においても必須の知見であると認識し、キーワード・キーセンテンス等をぜひ説明できるようにしてください。

## 第9章

### この章のポイント

最終章では、我が国の教育者たちの優れた考え方や実践事例を幾つか見てみましょう。注意すべき点は、いずれも教育の古典に着想を得ているところです。「1 林竹二とソクラテスの思想」「2 授業のカタルシス作用」「3 ケーラーの実験」「4 授業で子どもが抱えている不安の感情」「5 授業が成立する条件」「6 ドクサからの解放」「7 「一つの峠を越えた」という経験」「8 東井義雄の思想と実践」「9 児童詩「かつお（かつおぶし）」」「10 生かされている自分への覚醒 のどびこ事件」の各節を通じて、「ドクサからの解放」が教育の役割であり、「教育とは覚醒である」との気づきが得られるであろう。

以上、本テキストで触れる各事項は教育原理の最も基本的な事項ですが、決して陳腐なものではなく、現代の教育にも十分応用可能な普遍性を有するものであり、採用試験の筆記試験や面接試験でも非常に役に立つものです。キーワードやキーセンテンスを中心にぜひマスターしてください。